



篇文学全集  
31

多喜二  
百合子  
梶子



責任編集 臼井吉見

筑摩書房

---

日本短篇文学全集 第31卷

昭和43年11月15日第一刷発行

小林多喜二

著者 宮本百合子

佐多稲子

発行者 竹之内静雄

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8

郵便番号 101-91

電話 東京(291)7651

振替 東京4123

製版・明和印刷

印刷・多田印刷

製本・鈴木製本

定価 360円

---

## 目次

小林多喜二

残されるもの……………三

一九二八年三月十五日……………一〇

宮本百合子

風に乗って来るコロポックル……………七

おもかげ……………一五

三月の第四日曜……………二九

佐多稲子

虚偽	一五
合唱	一九
今日になつての話	二六
夜の記憶	三三
祝辞	三五
水	三六
鑑賞(久保田正文)	三七

装帧 桒折久美子

小林多喜二

## 小林多喜二（一九〇三—一九三三）

明治三十六年十月十三日秋田県北秋田郡下川沿村に生れた。四歳の時一家で小樽へ移住した。小樽商業・小樽高商時代「文章倶楽部」などへ詩・短篇小説の投稿を続けた。大正十三年北海道拓殖銀行に勤務。昭和二年小樽港湾労働者の大争議を応援し労働芸術家聯盟に加盟。昭和三年ナップの機関誌「戦旗」創刊され「一九二八年三月十五日」を發表、プロレタリア文学の最も有能な新人として認められた。「蟹工船」「不在地主」を發表、「蟹工船」は発禁になる。銀行は解雇された。昭和五年、日本共産党へ財政援助の嫌疑で逮捕され起訴され、豊多摩刑務所に収容された。昭和六年保釈になり日本共産党に入り、長篇「転形期の人々」をはじめ盛んな文筆・政治活動に従事した。昭和七年「党生活者」を發表した。昭和八年二月二十日築地署特高に逮捕され拷問により死去した。前記の代表作のほか初期の「滝子もの」など短篇も多い。

## 残されるもの

### 一

外から玉子が帰ってきた。

「誰か向いの貸家に人が入るよ。」そう光代に云った。

玉子が家うちに入ろうとしたとき、銀行員らしい、小ざっぱりした恰好かっこうの男が、その家の前に立って、しきりに中を覗のぞいていた。

二、三日して家主が多分「貸家」という紙片を剝はいで行つた。それから又二、三日した。細かい雨がこの露地に音もさせずに降っていた。——朝早くだった。家財道具をつんだ荷馬車が入ってくると、玉子や光代達のいる「曖昧屋あいまいや」の前にとまった。

十時頃起きた光代が二階の窓枠に腰をかけていた。向いに誰か入ったようだという事がすぐ分つた。光代は口にたまっていたニヤ／＼した唾を往来にはいた。その時表の戸が開いた。白いエプロンをかけた若い女が、半分戸から身体を出すと、戸に手をかけて、うへした上下を見て、

「どうしたんでしようネ、この戸。」と家の中に云った。

家の中で男が何か云っている。

「だってさ。」

そう云って、何度も戸を身体でゆすつた。が、すぐバケツを持つと、露地の出口にある共同栓に小走りこ走りに走って行つた。片手を髪にこわれないようにやりながら………。光代には気付かなかつた。

光代が三時過頃お湯へ行こうとして出たとき、市場の買いものゝ入っている手籠を持ったその若い細



君と会った。光代は相手を見ないようにした。が、変に胸がドキつき、赤くなつた。細君の方は、覚えてゐるような、いないようなアヤフヤな気持を顔に出してやはり落付かなく行き過ぎて行つた。光代はホツとした。

帰つてくると、玉子が、

「いくら淫売屋だつて、畜生、近所の家にはそばを配つていながら、こゝへは持つてこないなんて！」と怒つてゐた。

夜になつて、女達は、「即席御料理」と書いた、暖簾のれんのところ立つて、いつものように前をゆくお客を待つてゐた。が、皆はすぐ前の西洋風のちよつと出張つた窓を見ぬ振り、見てゐた。——そこが少し開いていて、細君が窓際に腰を下して赤子をあやしてゐた。赤子は細君の手の上で、身体をゆすりながらくびれてゐる両方の小さい手を振つて、ア——とそのたびに云つて燥せやいでゐた。両手で差

上げてやると、今度は足をも動かして喜んだ。それから赤子の頬や眼に日本流の接吻をしてやつた。赤子はくすぐたがつた。細君が頬の片方を舌でふくらししてみせる。眼をギロツとさせたり、口をとんがらしたりしてみせる………赤子はことごとくに喜んで、笑つた。三人は暗い表に立ちながらその一つ一つにひきつけられてゐた。

その時酔つた男が来た。それに気付くと、玉子は「鼠鳴き」をした。「寄つてお出でよ、兄さん、安くしておくよ。」と云つた。男は酔よぼ払つてゐるので、酒でかかれたザラ／＼の大声で、淫いん猥わいなことを云つた。「何、云つてるんだい。でこすけ！」玉子はプンとして怒ど鳴つた。

細君にそれが聞えたらしかなかった。子供を下へおろすと、窓に立つてちよつと暗い外をすかすようにしたが、障子になつてゐる窓をしめきつてしまつた。——と、光代と時子はためていた息が独りで、一緒

に、出た。二人は意味なく顔をあわせて、だまって笑った。

「畜生。」光代がひくゝ云った。

しばらくして、光代は自分の商売の遠征に出て、それからブラ／＼両側に手をさしこんだまゝ露地を帰ってきた。向いの家では西洋ものゝ蓄音機をかけていた。夜なので、それが往来にはつきり聞えていた。

玉子がつまんなさそうに、「ヤソの歌ばかりよ、チャカチャカッて！」と云った。そして爪先をカタカタいわせて拍子をとりながら、安来節をうたった。光代は家の前を行ったり、来たりしていたが、ひよいと立ち止って、

「玉ちゃん、ちよつと中のぞいて見るか？」と云った。

「うん——たまらないよ。」たまらない、という手振りをした。

「糞、いゝかい、みるよ。」

そう云って、光代が窓のところへソツと行くと、身体を曲げたり、のぼしたりして見えるところを探してみた、——が、見えなかった。

「駄目だ。」と玉子に云った。

「ん、その方がいゝんだ、かえって。」

光代がだまっていた。

「もう少し経つと寝るよ、早くねえ——若いんだもの……ねえ、ホラ、するとそこへかげがうつるさ……」

「フン。」光代はイラ／＼してくる気持を抑えていた。

それから二人ともちよつと黙った。「へん、めずらしくもねえや！」玉子は往来につばでもはき出すように、独言のように云った。

——十一時頃だった。

三人連れの酔払いが素客に寄った。散々入口でフ

ずけたり、女達に下品ないたずらをしたり、大騒ぎをして、結局上りもしないで帰って行った。ちやうど皆が何か怒鳴りながら露地を出て行ったとき、窓の障子が開いた。若い主人が顔を出した。室の光を背にしているので、顔は分らなかつた。

「今頃そんな大声で騒がれたりフ、ずけられたりしちゃ眠られもしない。もう少し静かにしてもらいたい……。」と云つた。

三人ともだまつていた。

それから主人は二言、三言口のなかで同じことを云うと、窓をしめた。

「へん、毎日朝の三時までこうやっているんだよ。」  
玉子が云つた。

二

その主人は銀行に出ている。

「朝、旦那さんが出て行くときねえ、ちアんところ

やって、帽子をもって……。」玉子が真似をして皆を笑わせた。光代は主人をまだ見なかつた。

それから二、三日するうちに、玉子も光代も向いの細君に話したりするようになった。

向いからもいろいろ言葉をかけてきた。赤ちゃんをちよつと貸してもらつて、この通りを、身体で調子をとつてゆすりながら、抱いて歩いた。

玉子も、光代も、時子もみんな赤子を抱くことを喜んだ。不思議なほど赤子が好きだった。

光代が口笛を吹いてきかせる、アッ、アッといつて、身体を振つて赤子が笑つた。

若い夫婦が向いに來てから（自分達ではちつとも気付かなかつたが）三人ともどこか變つてきた。向いの一つ一つが、それがたといどんな事でも、グイグイと三人を操つた。——向いの細君が化粧をしていたとか、夕方二人で出て行ったとか、キット活動写真へ行ったのだからとか、二人でイチャついてい

たのを玉子が見たとか、それから男の友達が来て、一晚中レコードをかけていたとか、……皆三人の女の子の話になった。そしてその話題が単に噂さというのではなしに、病的な興味と興奮を三人に与えた。

光代などは二人がイチャついていたとか、活動写真に揃って行ったとか、そう聞いたあとで身体を横なりにして坐ったまゝぼんやりいつまでも考えこんでしまった！

しばらく経ってからだった。

四時頃、光代が細君のところへまた赤ちゃんを貸して貰いに行った。赤ちゃんは座敷の中央まんなかに仰向けあおむけになつて、ちゞこまった足を動かしながら、くびれた小っちゃい拳固にした手をそのまゝ口に入れて、天井を見ながら何んか独りでアーアーと云っていた。細君は台所の障子を開けると、エプロンの前で濡手をふきながら出てきた。そして赤ちゃんを渡して

くれた。その時、主人が帰ってきた。

二人顔が合った。「こういう女に子供をあずけちゃ駄目だよ！」主人は露骨にそういう顔をした。

——光代は男を見てびっくりした、ハツと思つた。が、それより主人の顔が妙にゆがんだ。光代は主人を知っていた！ 光代が別の店にいた頃——三年ほど前——三、四回この男に買われたことがあつた。

光代は子供を抱くと外へ出てしまった。どんな顔をして、どうして出たか分らなかつた。顔があつくなつていた。

その露地を子供を抱きながら歩いたが、いつものようにおどけた顔をして笑わせることも、身体を拍子づけてゆすつてやることも、口笛を吹いたり、頬ぺたをつつついてやつて喜ばせることも——その気になれず、ぼんやり歩いた。

その男が来たときのことを、光代は記憶のどこからか探し出した。臆病気にオズ／＼していたことが

ある、それが最初だった。酔払って友達と来たことがある。すっかりもの慣れて大胆な、淫猥な、ことを女に、平気でしたことがある……が、それは別に際立ってはつきり分らなかつた。何故ならそういうことは女達にとって当り前の事だつたからだつた。然し、ただ「お前達を見ると、僕は何時でも心が暗くなるんだ。お前達は悲しい哀れな小さい聖女だ」という気がする。これは世の中のどこかが間違つてゐるからだ。」と云つたことが前と後の連絡なしに、その男と結びついてハッキリ今でも思い出せた。光代はその時——まだ純な気持のなくなつていない頃に、そういう言葉がどの位自分に響いたかを思った。が、記憶の上の光代はすぐグイと手元に引きもどされた。——窓が開く、光を背にうけて男が顔を出す、そして云つた言葉がはつきり返ってくる、「やかましいじゃないか、そんなにフザけて！」

この前だつた。光代が向いの家の隣りにちよつと

立ち寄つたとき、その女主人が、お隣りで近々引ッ越すそうだと云つた。

「子供が少しでも物心がつくようになる……。」と云つて、女主人は云い難<sup>ばか</sup>そうに光代の顔を見た。

「旦那さんがやかましいんだって、子供の教育に悪いッて。」

光代はだまっていた。その時はそれはそうだろうと思つた。——が、あゝ云つたことのある「あの男」が「そう」云つたのだ！

光代は自分達のところへ来て、それからしばらくして来なくなつたたくさんの男を思い浮かべてみた。そういうたくさんの男が、然しそれぐにちアんとした家庭<sup>うち</sup>をもって暮らしているのだ、と思つた。そして自分達とは云えど！ 光代は自分の身体のまわりを見廻わしてみた。深い感情が帰ってくるのを覚えてた。

雨が降りそうで、光代は後首筋あたりがひやく

としてきた。ちっともあやして貰えない赤子は、口すみをゆがめて今にも泣き出しそうになった。光代はその顔を見ているうちに憎くなった。放つたらかして置け、そういう気になった。が、すぐその後から、妙に淋しい悲しい気持になった。ポタリ、仰向けになってゐる赤子の頬に光代の涙が落ちた。

赤子は急にはげしく泣き出した。

三

日曜日だった。細かい雨が露地に音もさせないで降っていた。

十時頃、光代が窓から、向いの家の前に荷馬車が家財道具を一杯に積んで止っているのを見た。光代は何か見てはならないものを見たように思った。そして窓をしめ切ってしまった。

が、何をしてもちっとも心が落付かなかつた。意識が妙に向いにひきずられた。しばらくして、荷馬

車の動き出す音がした。光代は二階に上ってゆくと、窓をあけて表を見下した。車はやがて角を曲って見えなくなった。

行ってしまった！

ゴトン／＼という車の音が聞えなくなると、少し降りになってきた雨の音が急に耳につき出した。

——光代は視線をもどした。向いの家には「貸屋」という札が又貼られていた——家の中がガランとして。

この事が分ると、皆は急にがっかりしてしまった。殊に光代はその晩へ、べれけになるほど酔払った。そしていつも口にしないうようなことを云った。「畜生！ 火をつけてやれ。」「野郎、野郎、殺してやればよかつた。焼き殺してやるぞ！」そんなことも云った。

が、光代はしばらくすると、転がり廻るほど苦し

み出した。そして二階の窓から往来へ、とう／＼す  
っかりものを吐いてしまった。夜はすっかり更けて、  
雨はもうやんでいた。光代は窓枠にぐったり身体を  
もたせながら、無気味に歯をギリ／＼ならした。

が、いつの間にか、そのまゝ光代は肩をふるわし  
て泣いていた！

(昭和二年二月)

一九二八年三月十五日

—

お恵には、それはそうなか／＼慣れきることので  
きない事だった。何度も——何度やってきても、お  
恵は初めてののように驚かされたし、ビク／＼したし、  
周章<sup>あわ</sup>てた。そして、又そのたびに夫の龍吉に云われ  
もした。然し女には、それはどうしても強過ぎる打  
撃だった。

——組合の人達が集って、議題を論議し合ってい  
るとき、お恵がお茶を持って階段を上って行くと、  
夫の声で、

「<sup>かかあ</sup>嬬の意識の訓練となると、手こずるッて……。」「  
そう云っているのを一度ならず聞いた。

「革命は台所から——これは動かさない公式だからなあ。小川さん、甘い、甘い。」

「実際、俺の嬉シ、ハッポだ。」

「ワイフとの理論闘争になると、負けるんだなあ。」と、そして、皆にひやかされた。

夫は声を出して、自分で自分の身体を抱えこむように、恐縮した。

朝、龍吉が歯を磨いていた。側で、お恵が台所の流しに置いてある洗面器にお湯を入れてやっていた。

「ローザって知ってるか。」夫が揚子で、口をモグモグさせながら、フト思い出して訊いた。

「ローザア？」

「ローザさ。」

「レーニンなら知ってるけど……。」

龍吉はひく、「お前は馬鹿だ。」と云った。

お恵はそういうことをちっとも知らうと思ひ、又はそうするために努めた事さえ無かった。それ等は

覚えられもしないし、覚えてって、どうにもならない気がしていた。「レーニン」とか「マルクス」とか、それは子供の幸子から知らされた位だった。一旦それを覚えると、自家にくる組合の工藤さんとか、阪西さんとか、鈴木さんとか、夫などが口ぐせのように「レーニン」とか「マルクス」とか云っているのに気付いた。何かの拍子に、だから、お恵が、「マルクスは労働者の神様みたいな人だんだってね」と、夫に云ったとき、夫が、へえ！ という顔付でお恵を見て、「どこから聞いてきた。」と賞められても、そう嬉しい気は別にしなかった。

然しお恵は、夫や組合の人達や、又その人達のする事に悪意は持っていなかった。初め、然し、お恵は薄汚い、それにどこかに凄味をもった組合の人達を見ると、おじけついた。その印象がそうすぐ近付けないものを、しばらくお恵の気持の中に残した。けれども変にニヤ／＼したり、馬鹿丁寧であったり



する学校の先生（夫の同僚）などよりは、一緒に話し合っていて気持よかった。物事にそう拘りがなく、ネチ／＼していなかった。かえって、子供らしくて、お恵などをキャツ／＼と笑わせたり、初めモジ／＼しながら、御飯を御馳走になってゆくと、次ぎからは自分達の方から「御飯」を催促したりした。風呂賃をねだったり、煙草錢をもらったりする。然し、それがいかにも単純な、飾らない気持からされた。だん／＼お恵は皆に好意を持ちだしていた。

港一帯にゼネラル・ストライキがあった時、お恵は外で色々「恐ろしい噂」を聞いた。あの工藤さんや、鈴木さんなどの指導しているストライキが、その「恐ろしい」ストライキである事が、どうしても初め分らない、と思つた。

「誰にとつて、一体あのストライキが恐ろしいって云うんだ。金持にかい、貧乏人にかい。」

夫にそう云われた。が、腹からその理窟が分りか

ねた。

「理窟でないよ。」

新聞には、毎日のように大きな活字で、ストライキの事が出た。○全市を真暗にして、金持の家を焼打ちするだろうとか、警官と衝突して検束されたとか、（そういう中に渡や工藤がいたりした。）このストライキは全市の呪であるとか……。お恵は夫の龍吉までが、ほとんど組合の事務所に泊りつきりでストライキの中に入っている事を思い、思わず眉をひそめた。龍吉が、寝不足のはれぼつたい青い、険をもつた顔をして帰ってきたとき、「いゝんですか？」ときいた。

「途中スパイに尾行られたのを、今うまくまいて来たんだ。」

そして、すぐ蒲団にくるまった。「五時になったら起してくれ。」

お恵はその枕もとに、しばらく坐っていた。お恵